



會田雄亮 「陶の庭」



2015年3月 会報70号

一般社団法人

日本建築美術工芸協会



「陶の庭」

會田雄亮

陶芸家・環境造形作家
 東北芸術工科大学名誉教授
 日本建築美術工芸協会会員
 同協会 元理事
 AACA 賞 元選考委員

CONTENTS

平成26年度 設立記念会・協会賞表彰式		3
平成26年度 AACA賞・芦原義信賞（新人賞）	表彰委員会	4~6
AACA賞を受賞して 「建築を通して素材からあるべき風景へと導く」	中菌哲也	7
第52回 aaca 講演会 「庭と風景のあいだ～近年の仕事を通じて思うこと」	川瀬俊二	8
街に飛び出す作品展 「賃貸集合住宅×アート」プロジェクト～街なかミュゼ～」	展覧会部会	10~14
第9回 aaca 阪神間・姫路・備前地区建物視察会 「光と建築の旅」	小見山信巳	15
時代の華一輪 「白の色彩からMAZIORAへ」	甲谷 武	16
時代の華一輪 「軽やかな空間と素材力」	大河内久子	17
調査研究委員会（情報文化部会）レポート 「3.11以降～東北の文化を考える～」	情報文化部会	18~23
新入会員・会員の移動・募金のお願い		24

開催日 平成26年12月10日（水曜日）午後5時45分～
 場所 建築会館大ホール（東京都港区芝5-26-20）
 来賓 文化庁芸術文化調査官 眞住貴子様
 〃 芸術文化課総務係 三浦牧人様
 〃 美術年鑑社 代表取締役 油井一人様
 〃 営業企画部長 設楽昌弘様
 出席者 来賓・報道関係 7名 会員・一般 58名
 受賞者・応募者 24名 合計 89名
 次第 会長挨拶 会長 岡本 賢
 来賓挨拶 芸術文化調査官 眞住貴子様
 選考結果発表 表彰委員長 可児才介

岡本 賢会長 挨拶

本日は設立記念会にご多忙のおり、多数お集まり頂き誠に有難うございます。又、文化庁より、眞住芸術文化調査官のご臨席を賜り誠に有難うございます。

これから、AACA賞・芦原義信賞の表彰式が執り行われますが、まず最初に受賞されました皆様に心からお喜び申し上げます。誠に有難うございます。

AACA賞は24回を数える事となりまして、建築関連の賞としては大きな賞となって来たのではないかと自負をしております。この建築・美術・工芸が一体となって景観に貢献する賞は、ほかの建築関連の賞と違ってまったくユニークな賞ではないかと考えております。特に建築というのはもともと人々の生活環境に多大影響のあるものですが、そういった生活環境をさらに高めるアートと云う要素が欠かせないのではないかと云うところから空間創造の芸術が一体となって人々の生活環境を向上させるような意味を持った作品が、AACA賞・芦原義信賞に選ばれていると考えております。受賞された皆様方はこれからそのような考え方の下で、さらに今後様々な作品でご活動されるよう、ご祈念申し上げます。

当協会は、会員の皆様のおかげをもちまして様々な企画が展開されております。このAACA賞の表彰事業を始めとして、景観シンポジウム・建築フォーラム・セミナー・展覧会とかいろいろな企画を毎月のように行っておりまして、会員の皆様方がそのような場でいろいろな形で情報発信することが、この協会の使命ではないかというふうに思っております。こうゆう建築と美術に関わる様々な形の情報を広く社会に発信することで、この協会の存在感を高めていきたいと考えております。

今年度は全く新しい試みで「街に飛び出す作品展」を実施いたしました。これは進行中の建築プロジェクトとアーティストが一体となってコラボレーションを行い、建築空間の中にアート作品を取り込むという目的で展覧会を開催し、クライアント・事業者と協会の審査員が出展作品の中から選んで、建築プロジェクトに取り込んでいくという、まったく建築美術工芸協会として相応しい大きな事業が実施されました。

まさにこのような形で社会の中にアートがいかに浸

透していき、アートが加わることによって建築の付加価値が高められると同時に、人々の生活に潤いをもたらせることに繋がるのではないかと考えております。

ぜひそのような形で、協会の活動は活発になっていくことを期待しております。どうぞ皆様方も日本建築美術工芸協会の事業にご支援いただきまして、これからの発展にご尽力いただければ大変ありがたいと思います。簡単ではございますが、私の挨拶とさせていただきます。どうも有難うございました。

文化庁芸術文化調査官 眞住貴子様 挨拶

一般社団法人日本建築美術工芸協会第26回設立記念会及び協会賞表彰式の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

はじめに、栄えある各賞を受賞されます皆様方誠におめでとうございます。このたびのご受賞を心よりお慶び申し上げますとともに、これまでのご研鑽に深く敬意を表し、さらにこれを契機として今後益々ご活躍されますことを、お祈り申し上げます。

一般社団法人日本建築美術工芸協会はいま会長よりお話がありましたとおり、豊かな芸術的環境の創造と保存を図り、建築家・美術家・工芸家等々芸術に関わる様々な人々との連携と協力を通じて、永年にわたり我が国の文化の向上・発展に大きく貢献をして来られました。そのご功績は大変意義深く、関係者の皆様方のご尽力に対し心から敬意を表します。

さて文化の祭典でもある2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催控え、我が国の文化芸術は発展の好機を迎えております。成熟した社会となった我が国において様々な芸術活動が行われており、国民の間でも文化芸術を愛好する機運が高まっております。文化芸術は皆様に云うまでもなく、人々に多くの恵みを与えるものであり、その進行は心豊かな活力ある社会を創造するためにも重要なものであります。

一方でソーシャルメディア等の発展は人と人との繋がり方や文化芸術のあり方にも変化をもたらしてきております。急速な変化にさらされた社会の中では、従来の活動を踏襲するだけではままならないことも多く出てまいります。それゆえ、貴協会のように様々な専門性を持った人々が連携し、協力しあうことがこれからの世の中でより一層重要となって来ることでしょう。

文化庁におきましても様々な取り組みを行っているところでありますが、我が国の文化芸術の進行を図っていく上で、日頃から芸術活動にたずさわる皆様の意欲的な活動を欠かすことはできません。本日お集まりの皆様方に於かれまして、引き続き我が国の文化芸術の発展のためにご尽力いただきますよう、心からお願い申し上げます。

結びに 一般社団法人日本建築美術工芸協会の今後益々のご発展と、皆様方のご健勝を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

本日は誠に有難うございます。

審査総評

選考委員長 芦原太郎

一般社団法人日本建築美術工芸協会の主催するAAC A賞・芦原義信賞は景観・街並み・ランドスケープから建築空間やインテリアまでスケールを問わず建築・美術・工芸の力で人々に感動を与える環境や空間を創り出している作品を表彰するものである。本年度の審査は応募作品42点の中から、1次審査で現地審査対象作品を13点に絞り2名以上の選考委員が現地に赴いて、設計者や管理者から説明を受けて現地審査を行った。

最終審査会において現地審査の報告を担当選考委員が行い、全員で議論を行った上で受賞作品を決定した。

結果は、AAC A賞1点、優秀賞2点、特別賞1点、奨励賞3点、芦原義信賞1点、同特別賞1点となった。

AAC A賞の「潜水士のためのグラス・ハウス」は海岸に廃材のコンクリート塊を利用して人々に感動を与える魅力的な空間を創り出している。海岸、潜水士の仕事、材の再利用と言ったものを上手く関係付けて、法的には建築でなく、また彫刻でもない既成概念に捕らわれないユニークな発想を高く評価した。

優秀賞の「狭山湖畔霊園の連作」は、精緻な建築の技により霊園に相応しい精神性を獲得しているし、「資生堂銀座ビル」は、外装・インテリア・家具・備品にいたるまでトータルにデザインされ、デザインの力で企業イメージに相応しい美が表現されている。芦原義信賞の「ヤンマーリーナホテル/セトレマリーナ琵琶湖」は、建築に真摯に向き合い可能性に挑戦している作者の姿勢をまさに新人賞に相応しいものとして芦原義信賞とした。また芦原義信賞特別賞の「MECENAT ART PROJECT」は、ユニークな美術館でありアートとの連携で新鮮で魅力的空間を創り出している。この作品についてはAAC A賞にあるいは芦原義信賞にと議論がなされたが、同じ作者の「潜水士のためのグラス・ハウス」を作品として高く評価しAAC A賞としたので、作者の姿勢を評価し将来への期待を込めて芦原義信賞特別賞とした。本年度は意欲的な作品が見られた事が大きな収穫であり、未来に期待出来るようなことを嬉しく思った。日本建築美術工芸協会にはこのAAC A賞を通して次世代に向けて私達の共有財産である様々な空間の文化的価値を高める運動の推進を期待したいと思う。

第24回AAC A賞 受賞作品

AAC A賞

「潜水士のためのグラス・ハウス」

作者： 中菌哲也・名和研二

所在地： 広島県江田島市大柿町深江宇島戸



(撮影：矢野紀行)



AAC A賞・優秀賞

「資生堂銀座ビル」

作者： 榎竹中工務店 濱野裕司・美島康人
株式会社 資生堂 信藤洋二

所在地： 東京都中央区銀座



(撮影：ナカサアンドパートナーズ 伊佐 猛)

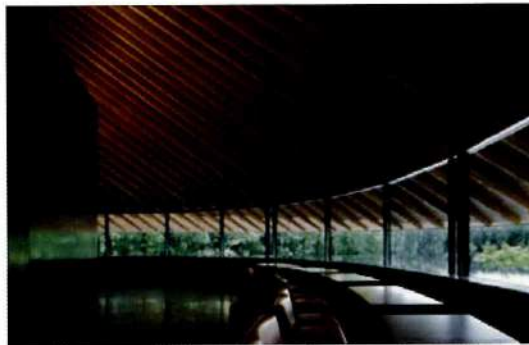
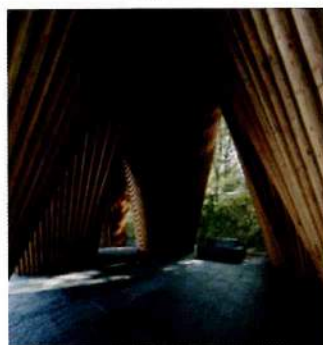


「狭山湖畔霊園の連作」

-狭山森の礼拝堂・狭山湖畔霊園管理休憩棟

作 者： 中村拓志&NAP建築設計事務所

所在地： 埼玉県所沢市大字上山口字前久保峰



AACA賞・奨励賞

「L'angolino」

作 者： design 山中コ〜ジ、山中悠嗣、山下麻子、吉松静香、
construct 須永一久、白 栄一郎、辻井啓嗣、
structure design 高見澤孝志

所在地： 群馬県館林市花山町

(撮影者：近藤泰岳)



「八海山雪室」

作 者： KAJIMA DESIGN 星野時彦

所在地： 新潟県南魚沼市長森

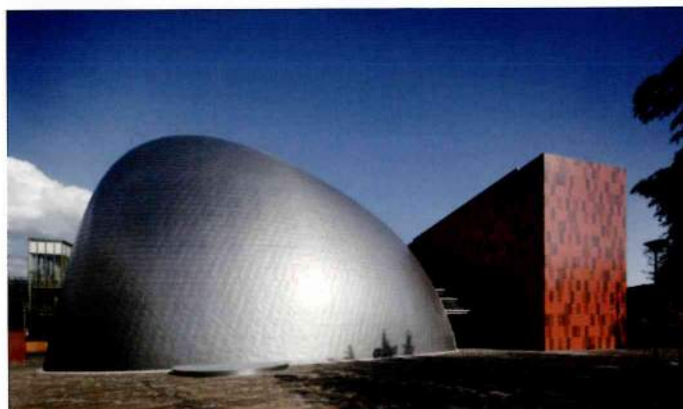


(撮影：
㈱SS東京 島尾望)

「Silver mountain & Red cliff」

作 者： k/o design studio+KAJIMA DESIGN

所在地： 神奈川県川崎市高津区久本



(撮影：ナカサアンドパートナーズ 中道 淳)

AACA賞・特別賞

「GINZA KABUKIZA（歌舞伎座・歌舞伎座タワー）」

作者： ㈱三菱地所設計 取締役社長 大内政男
東京大学 教授 隈 研吾
建築家 今里 隆
石井幹子・石井リーサ明理+㈱石井幹子デザイン事務所
松竹㈱ ㈱歌舞伎座
所在地： 東京都中央区銀座



(撮影： ㈱小川泰祐写真事務所)



芦原義信賞

「ヤンマーマリーナホテル/セトレマリーナ琵琶湖」

作者： 芦澤竜一
所在地： 滋賀県守山市水保町



(撮影： 市川かおり)

芦原義信賞・特別賞

「MECENAT ART PROJECT」

作者： 中藪哲也・名和研二
所在地： 広島県東広島市黒瀬町檜原



(撮影： 矢野紀行)





中 蘭 哲 也

一級建築士

ナフ・アーキテクト&デザイン有限会社 取締役
 崇城大学(旧名熊本工業大学) 助教
 日本建築美術工芸協会 会員

構造家の名和研二氏との協同プロジェクトである「潜水士のためのグラス・ハウス」と「MECENAT ART PROJECT」が、それぞれ2014年度のAACA賞と新人賞特別賞を受賞した。この二つのプロジェクトは、これまで手がけてきたプロジェクトの中で、私の考える建築としてのあるべき姿を比較的素直に表現してくれている作品たちである。

AACA賞を受賞した「潜水士のためのグラス・ハウス」は、廃棄されるはずだったコンクリートのみを再利用して作られた、1個重さ約1.2t (W1m×D1m×H0.5m)のコンクリートブロックを組積して作られた建築である。このブロックは一見特殊な素材として見えるが、この建物がある広島県江田島では、柑橘類を育てるための段々畑の擁壁や牡蠣イカダのアンカーなどに日常的に長年使われてきたもので、ひっそりとはあるが、江田島の風景を形成する役割を果たしてきた。

この建物は、世界中の海で潜水作業を行う企業からの依頼で、危険な潜水作業から解放されたスタッフのための保養所として建てられた。

この企業の潜水士の行う任務とは、水中で行う土木作業であれば原則一人で様々な業種をこなす。測量、調査、型枠、配筋、コンクリート打設、溶接、消波ブロック敷設、解体作業等々挙げればきりが無い。

このブロックを利用したアイデアを、クライアントにプレゼンテーションする前に通常の建築業者に相談したところ、一蹴された。それでも設計者としての思いと気概から、水中で何でもこなすクライアントである潜水士の方であれば何か突破口があるのではと、不安を抱きながらも、この建築のコンセプトと概要を説明した。答えは「できないわけがない」という意外にもあっけらかんとした回答だった。

彼らからすると、酸素がない、潮の流れで体が常に揺れていて海底を足で踏ん張れない、1m先の視界がない、かけ声さえもかけられない状態で、数十トンの消波ブロックを整然と並べる作業を日常的に行っているのである。冷静に考えれば、「できないわけがない」当然である。

そこからは、クライアントから江田島のブロック積みの職人や業者を紹介いただき、着々と工事を進めることができた。

前面道路の幅員が2mない狭い道路のため長尺の屋根

材や鉄骨材の搬入で困っていたときなどは、計画敷地よりも大きなデッキパージをクライアントが用意してくれて、満潮時をねらって、1時間程度で材料搬入が完了した。

この建物は通常の建築と比べると、その形式やスケールや佇まいから一見特有の尺度を持っている。ただ、その建築物の細胞ともいえる、一つ一つの素材の成り立ちや歴史、それらを成立させている技術力やそれを束ねる人と人とのつながりは、これまでの江田島の歴史や自然環境から自然と生まれ、また育ってきたものである。

そのような意味で、この建物は一つの「物」として存在する他に、その背景に脈々と流れる土地の歴史、文化、社会、自然を体現する建築を超えたスケールで風景として存在している。

わたしはこのプロジェクトを経験したことがより次の事を強く思わせるようになった。形式や形態・空間からのみ建築を提案するのではなく、その土地に由来する素材・環境を発見し、そこに存在する社会的問題解決を同時に満たしてくれる建築物を目指したい。

現在、自身の大学の研究室と構造・材料の研究者たちと、牡蠣殻・にがり・石灰など自然の恵みから生まれるシェルポラス材の研究と、その素材から生み出される新たな建築物の可能性を探っている。

実社会で設計業務を行っている、つい目の前の課題にたいしてのみ集中し過ぎて、その先にある問題や未来の可能性に対して盲目になってしまうことがある。当然、目の前の課題を解決しそのプロジェクトを実社会に実現しなければならない。

ただ、私のように大きな組織を持たない一設計者が、社会や人間の営みに貢献し、存在価値を見いだすとすれば、その場の問題を解決しながらも、その延長線にあるさらなる課題や未来を見据えながら、実務としての設計業務と研究活動を一連の創作活動へと導くことがそれらを実現することだと考えている。

目の前の的を見据えながらも、それを超えてできるだけ遠くにボールを投げていきたい・・・



研究中のシェルポラスによる建築の提案



川瀬俊二

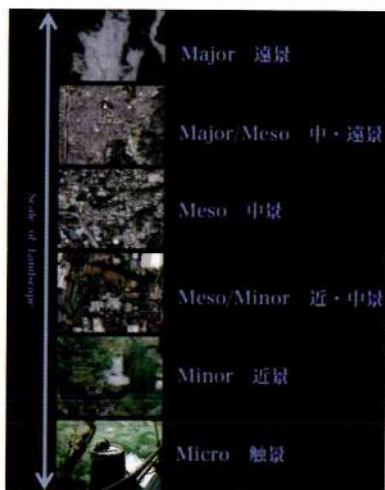
株式会社 大林組 建築本部

日本建築美術工芸協会 理事

aacaの講演会シリーズで、かねてよりランドスケープ・アーキテクトの方に講演をお願いしようと思っていました。なぜならランドスケープ設計は、建築・美術・工芸に深く関連した分野の仕事だからです。そこで、今回は国内外で活躍されている宮城俊作先生に講師をお願いしました。

講演のタイトルは「庭と風景のあいだ」です。

私たちは、遠景中景近景という言葉は記憶にあります。先生は、山水 San-Sui=Garden という概念から、そのスケールを巡って、Major 遠景 ~ Major/Meso中・遠景 ~ Meso 中景 ~ Meso/Minor近・中景 ~ Minor 近景 ~



Micro触景と云う分類をし、ランドスケープの捕らえ方を分かりやすくヴィジュアルに解説されました。

Major遠景では「鴨川から北山の稜線の重なりを望む」風景が引用され、Major/Mesoでは、「京都疎水・岡崎地区から東山を望む」風景が、Major/Mesoでは、「京都疎水・岡崎地区から東山を望む」風景が、Meso/Minorで「對龍山荘の池／緑」、そしてMicroで「緑先手水鉢」などが出来て来て、私達は次第に宮城先生のランドスケープの世界に引き込まれていったのです。



京都疎水・岡崎地区から東山を望む



緑先手水鉢

近作を通じて最初の作品解説はザ・ペニンシュラ東京です。これはまさに都心に建てられたシティホテルですが、概念的に、コンパクトな空間を円形の壁により結界を創り、車回しの広場はアトランダムな形の石を散りばめた美しい水景を配し、大型バスなどがこの水景床面に直接載ることができるような機能的な工夫がされています。普段、私たちが何気なく見ているペニンシュラの玄関先に、このような設計プロセスがあったことを改めて知ることが出来ました。



ザ・ペニンシュラ東京



次に紹介されたのはザ・キャピトルホテル東急です。首相官邸の近くに建てられた、これも都心型ホテルですが、ランドスケープは、白い花崗岩の大きな敷石、自然石、池、飛び石などで、和のテイストの落ち着いた佇まいが演出されています。そして敷地境界に設計された水盤は隣地の緑を映し出し優れた借景が計画されています。



ザ・キャピトルホテル東急

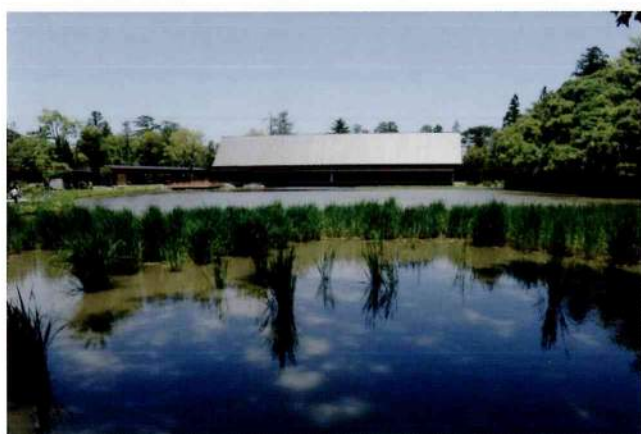




宮城先生のアトリエ



宮城先生が主宰するプレイスメディアは東京小平にあります。関西にも仕事場があり、宇治のアトリエは、先生の実家のある平等院の西の軸線に位置し、平屋の住宅的スケールの中に洗練された空間が、素晴らしい環境の中に創出されています。庭に面した立面は、玄関、窓など開口を絞り、白い壁で端正な表情をしています。アプローチの敷石は、ごつごつとした自然石が無造作に置かれた素朴な感じで、これも温かみのある「Micro触景」の一つと感じました。宮城先生は奈良女子大の教授をされていますが、このアトリエには先生の個室と仕事場があります。会議テーブルの置かれた仕事場では、学生のゼミや懇親会も行われるとの事で、このような素晴らしい空間でスタディの出来る学生たちは、本当に恵まれています。



「せんぐう館」は、建築家、栗生明氏と組んで設計プロポーザルに応募し獲得された仕事です。この建物は、第62回神宮式年遷宮を記念して



創設されたもので、その理念は「20年に一度行われる遷宮を通じて、広く我が国の伝統・文化を伝え、日本人の営み、精神文化の中心にある神道の継承を目指します。」と謳われています。この課題に対し、宮城先生は、「遷宮の伝統を伝える場の顕在化」と「デザインを施した場の非顕在化」という二つの対比した概念で臨まれました。

「顕在化」では、建築～水面～宮城林の視覚的關係（汀線に沿った建築配置、水面の輪郭と広がり）、参拝者のシーケンス（屋根の視認性、透過性の高い建築とランドスケープ）に留意され、非顕在化では、景観戦略的な保存樹の選定、曖昧さを内包するディテールデザインで、見事な空間を設計され、2013年AACA賞を受賞されています。ペニンシュラやキャピトル東急では、都心のホテル空間を造り、せんぐう館では、まさに神域の崇高な空間をデザインされ、先生の創造領域の広さに改めて感心した次第です。

最後に平等院阿弥陀堂平成修理事業について、お話し頂きました。この修復は約2年間かけて行われ、柱や扉を赤茶色の「丹土」で塗り直し、瓦屋根の修復、鳳凰をはじめとする金属の装飾に金箔を施したもので、2014年4月1日より拝観が開始され、9月30日に予定されていた全ての工事が終了しました。丸太で構造材を建て、素屋根で作業場を確保し、屋根瓦の補修の様子、木工、左官作業や飾り金物や金箔の工事など大変貴重な修復のプロセスを見せて頂きました。



今、日本は2020年のオリンピックに向けてインバンドも1300万人を越えようとしています。来訪する外国人にとっても、我々日本人にとっても、美しい日本を維持・創出していくために、ランドスケープの概念、技術が如何に重要か再認識した次第です。宮城先生、貴重な講演をありがとうございました。



「街に飛び出す作品展」は盛況のうちに無事終了し、多くの作家の皆さま、aaca実行委員の方たち、そしてご協力頂いたオーナーの皆さまに御礼申し上げます。ありがとうございます。

スターツCAMでは20年ほど前から賃貸集合住宅に免震構造の採用のご提案を土地オーナー様に行っており、並行して井戸の設置のご採用をお願いしております。大災害に限らず街角に井戸があり、日常的に人が集える場所があるということは、地域のコミュニティーの形成を促し、地域や街の資産を守ることになります。凄惨な事件が相次ぐ社会状況の中で地域を守る意思を地域自身が持ち、小さいながらも地域でコミュニティーとしてつながることが、最良の防災対策だと考えます。免震建物に井戸を設置するということはマンションという個人の資産でありながら、街や社会に対して開いているという信号でもあります。また、井戸の設置を進めていく中で分かってきたこともあります。井戸や地域貢献に共感して頂けるお客様が実に多いことです。建築するお客様は経済合理性を追求することが全てではないのです。これは建築が本来持つ公共性や社会性が地域に貢献する一例で、私たちの仕事が社会貢献として誇りに感じる瞬間です。

この度縁あって、こういった取り組みをスタートできたわけですが、作家の皆さまが丹精込めて制作したアート作品が、我々がご提案させて頂く賃貸集合住宅に設置され、芸術性の高い豊かな空間が地域に広がり街の誇りとして地域に根付いていく事を切に願っております。

引き続き皆さまのご支援を宜しくお願い致します。

スターツコーポレーション 代表取締役副会長 関戸博高

日本建築美術工芸協会は、景観・街並み・ランドスケープから建築空間やインテリアまで、スケールを問わず建築・美術・工芸の力で人々に感動を与える美意識に支えられた、環境や空間を造り、様々な場面で文化的価値を高めていくことを目指しています。

「街に飛び出す作品展」という形で、建築とアートのコラボレーションを建築主と共に具体的に進めるという企画で、作家のみなさんに提案してもらう展覧会が実現しました。

出展作家が建築空間とアートとの関わりを考えて応募されているかを主眼に選考しました。建築空間とアートの関わりについて建築を造る時、建築家は様々な角度からどのような空間を造ればよいかを考える。建物が建つ敷地周辺の環境、その地域の街並みや歴史、いわゆる敷地のコンテクストです。それらの要素を考慮したうえで設計していきます。更に、快適で、皆が楽しむことのできる、そして意味のある空間にした方がはるかに良く、その様な空間を造るには、アートの存在は欠かせない要素の一つであると考えています。一方、作家は建築家のコンセプトを読み取り空間把握を行いながらアートの提案を行わなければなりません。作品として第一級のものでも置かれる空間に存在意義が認められなければ存在できません。空間を決定づける作品とは、作品の個性やエネルギーが空気感をより一層濃くし、空間との相互作用することを目指して行くものです。展示空間を読み解く作業から作品応募に至る作業がなされているようには見えない作品が多くみられたことは今後課題を持ち越したと考えています。

日本建築美術工芸協会のこのような企画を通して、建築空間とアートの調和を実現し発信していく機会として取り組んでいくことを期待しています。

推薦者選考委員会 選考委員長 梶屋 正

建築・都市空間に美術・工芸などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくりを推し進める試みとして、スターツCAM(株)とクライアント様のご協力で“街なみミュゼ”企画に先立つ「街に飛び出す作品展」を開催しました。

応募出展作品37点を第1次審査でaaca推薦者選考委員会梶屋正委員長ほか3名の選考委員により20点を推薦作品とし、本選考はスターツコーポレーション関戸博高、神奈川計画・向島計画・春江町計画のクライアントの皆様にご選定いただき14作品が決定しました。春江町計画ではすでに12月25日搬入設置を完了しました。向島計画は2015年3月竣工予定、神奈川計画は2015年6月竣工予定です。順次aacaホームページにアップします。

作家にとっては、日頃制作した作品が多くの人に鑑賞してもらえる良い機会となり、一方クライアントには建物がアートによって、より豊かな空間になることを実感していただき、アートを通して作家とクライアントの新しい関係が生まれることを期待しています。来年度も引き続き「街に飛び出す作品展」の開催に向けて課題選定の準備を進めています。会員作家とともに、作家と建築家とのコラボレーションによる提案、一般参加者の応募にも大いに期待しています。アートがパブリックで担う役割を「街に飛び出す作品展」を通してaacaの設立理念の実践として、ますます広がりを見せるよう展開してゆきます。

「街に飛び出す作品展」展覧会実行委員長 安河内敦子

神奈川区計画

設置予定：2015年6月



鈴木 法明

ようこそ21世紀へ 種を播く人
チタン、ステンレス 立体
w1400×h2000×d1300

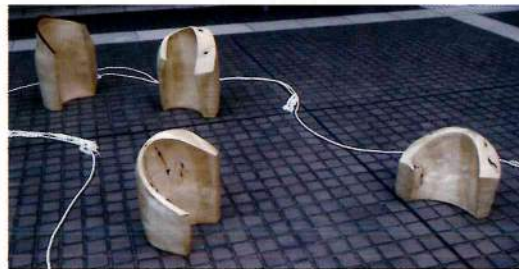


平山 健雄
無題
ガラス 平面
w400×h700



帆足 枝里子

景 No.2 陶土・木 平面
w1700×h1800



野口 真理

黄の中に風 陶土 立体
w320 ~ 420×h460 ~ 630
×d250 ~ 460

春江町計画

設置予定：2014年12月



鍵井 保秀
SWEET HEARTS
インクジェット
ポリエステル 平面
w540×h210



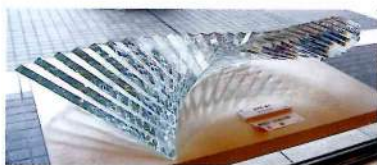
鍵井 保秀
GOLDFISH
インクジェット
ポリエステル 立体
w400×h2200×d400



川原 昭
優遊 FRP 立体
w1200×h1800×d800

向島計画

設置予定：2015年3月



安河内 敦子
シェル No. 3 ガラス 立体
w450 × h200 × d450



山崎 輝子
幡 (ばん) 牛革・牛床・金箔・漆
平面 w700 × h900 × d40



吉野 ヨシ子
滴の詩 金属 立体
w450 × h700 × d300



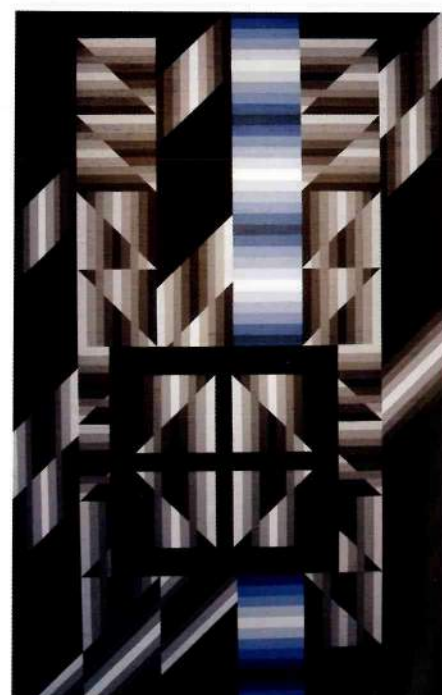
白野 順子
地球の輝き 染織・キルト 平面
w1300 × h1800



山崎 輝子
雨水 (うすい) 牛革・金箔・顔料
平面 w730 × h145



中野 恵美子
To Where? - Machupicchu
綿 染織 平面 w850 × h1600



山崎 和子
Move on Time 染色 平面
w970 × h1620



高部 多恵子 プラザ12-1・2・3



服部 多加志 獅子吼



石原 真理 みのがしていた・きせき



内田 滋子 シリーズ森の詩



椎橋 文子 ナンテン



片岡 雅子 季節風



泉水 眞澄 少女



松本 治子 楽龍中



松本 治子 琴線



吉田 佑子 永遠に続く水の流れの如く



三上 紀子 まちとアートと金魚とわたし





大鷲 貞男 風の梯子



大鷲 貞男 冬の風格



大鷲 貞男



伊藤 五恵 襲



山崎 輝子 SQUARE



平山 健雄 光のペルリナージュ



鍵井 保秀
GOLDFISH



安河内 敦子
プレアデス45



北潟 敦史 くうきのかたち



千葉 伸子 脊椎と球



村松 勢津子 未来への譜



重松 慧祐 無題II



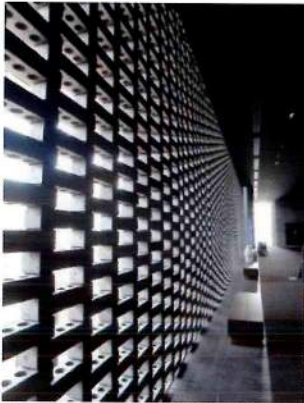
小見山信巳

建築家

株式会社 久米設計 設計本部

日本建築美術工芸協会法人会員

澄みきった秋晴れの11月、大阪から視察会は始まった。日建設計江副さんの案内で大阪弁護士会館を観る。細身で洗練されたビルのロビーに足を踏み入ると、柘器質のレンガがもたらす重厚さと、一段置きに空隙が出来るように積まれたレンガスクリーンから差し込む光のコントラストが、品位ある清浄な空間を創り出している。素材感を際立たせるためにシンプルさにこだわったディテールが工芸品を思わせる建築であった。



大阪弁護士大会館ロビー



甲子園会館の陰影のあるタイル

甲子園会館は1930年に甲子園ホテルとして建てられた。フランク・ロイド・ライトのもとで旧帝国ホテルの設計にも携わった遠藤新の名建築である。武庫川女子大は、この甲子園会館と新築した建築スタジオで建築教育を行っている。優れた建築空間を実感しながら学ぶ環境は学生にとってうらやましい限りだ。建築スタジオは深い水平の庇やボーダータイルでその調和を図りPca柱や床版などシステムティックな建築とともに開放的な空間となっていた。日建設計岡田さんは、「生きた教材」としての建築を目指したという。細かな陰影のある甲子園会館と水平の陰影をもつ建築スタジオ、どちらの建築も光を意識させるものとなった。



武庫川女子大
建築スタジオ

竹中道具館は建築、展示どちらも技術の粋を尽くして生まれた建築だった。モダンな建築のなかに伝統の職人技が散りばめられており、いつまでも観ていたいと思った。設計した竹中工務店須賀さんからは存在感を消した構造と無垢材を使った伝統の船底天井にそのこだわりを伺い、木が織りなす陰影に温かさを感じた。



竹中道具館
ロビーの船底天井

次の日も晴天に恵まれ、建築家の手嶋保さんの案内のもと、「伊部の家」を観た。備前焼の工房と一体となったシンプルな構成の住宅には、素朴な素材と緻密なディテールそして東西からの間接光に包まれた、豊かで静寂な空間に心が洗われた。

ジェームズ邸は有形文化財に指定されることによる、保存とリノベーションの幸せな事例である。竹中工務店中村さんの説明にあった近代建築との調和と、その活用による存続の在り方に感銘した。



ジェームズ邸 チャペル



閑谷学校 野石積の土留

閑谷学校は建築家竹原義二さんの案内で、建築を読み解くその接し方に共感した。学校のおかれたその環境に視線をおき、治水のための土留の素晴らしさは環境とともに生きる建築とはどうあるべきかを教えられた。土留の高さと建築の視線の交わりなど、一見自然に見えるその設えには、計算された空間への本質がある。竹原さんは時に、雨の日はこの山奥の閑谷を訪れるという。雨の流れも建築の一部になると・・・私も一度訪ねたくなった。

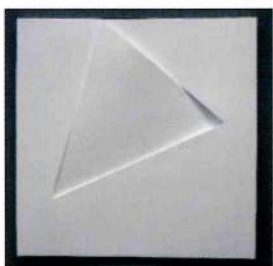
今回の旅は秋の日差しのなかでどの建築も光に浮かび上がるような感じがあった。また、設計を行った建築家に直接、そのコンセプトを聞くことで、より深く建築に接することができたことに深く感謝している。



甲谷 武
現代美術家

モダンアート協会会員
日本美術家連盟会員
日本建築美術工芸協会会員

今年は古希を迎えることになる。絵の道に足を踏み入れて50年が経過した。初期は油彩で心象的な風景を描いていたが、飽きらずに抽象造形の世界に画風が変わっていった。木やプラスチックの板をレリーフ状に切り凸凹をつけ、白一色の作品にすることで、作品の一段と高い部分の影が低い部分に影を落とす観る角度で自在に影が動く光と影をテーマに取り組んできた。



1979 Super White



1983 白の構造

7年ほど前に転期が訪れる。日本ペイント社製MAZIORAという特殊偏光塗料との出会いだ。この塗料特性は見る角度によって色彩が多様に変化する。例えば濃いブルーから紫に、ゴールドからシルバーへと色彩の変化が著しい。主に車の外装塗料として使用されている。塗装方法は一層目にカラーベース、二層目にMAZIORA、三層目に透明樹脂塗料をスプレーガンで塗布。高度な塗装技術を要し何度も失敗を繰り返した。更に難点は塗料が高価で0.9kg1缶で一カ月の年金収入が吹き飛んでしまう魔性の塗料に取りつかれてしまった。

昨年三重県立美術館で甲谷武展を開催して戴いた。前期と後期三カ月に亘る展覧会で、初期の作品から現在のMAZIORA作品まで展示された。これまで展覧会出品作品は、返却されてくると梱包のまま作品庫に収納していたため、作品の多くが作品庫で眠っていた。初期作品から現在に至る作品を一堂に展示する機会がなく、開催期間中はいくども美術館を訪れ、会場で私はなぜ白色に固守してきたのかその疑問に自問自答した。展覧会期終了近くになって疑問が解けた。私の白は「あの時の白」が原点であったのか。あの時の白とは時代が50年程遡る。学生の頃グライダー部に所属、操縦練習は自衛隊明野航空学校の滑走路の端を借りた飛行練習で飛行はウインチカーで、グライダーに取り付けた牽引索を巻き上げ、上空で牽引索を離脱して操縦練習を行う。夏の終わり頃、天候が悪くなり私の飛行を最後に練習を終了することで飛び立った。高度400m近くに上昇時点で曳航索を離脱、水平飛行にはいりこれで自由な空の散歩と思った時、前方に真っ白な雲が立ちほだ

かってきた。アッと言う間に機は雲の中に飛び込んでしまった。低空での雲の出現など聞いた事がなく、飛行経験もない今置かれている現実、純白の世界でなにも見えない上空も地上も機の傾きさえ分らない真空の白い世界に我身を置いている。実は当時からグライダーにはエンジン関係以外の飛行計器は取り付けられていた。速度計、高度計、コンパス、旋回計等飛行に影響する事はない。地上から無線が入ってきた、「地上が見えるか」「なにも見えません」続いて指示が来たスポイラー(エアブレーキ)を全開にしての降下指示だ。しかし着陸するにも、滑走路はおろか飛行場さえ見えない私は、死を覚悟した。かなり降下してきた時一瞬雲の切れ間から飛行場の一部が見えてきた。そして飛行場の全容が見えた時、目の前に自衛隊の落下傘乾燥塔が突っ立っていた。乾燥塔は飛行場で一番高い建物でこのままでは乾燥塔に突込んでしまう、左旋回を試みるが舵が動かない。グライダーはスポイラーを全開にした場合超過禁止速度を超えない設計にはなっているが、その速度を超えて、操縦桿を力いっぱい倒してわずかの左旋回で衝突は避けた。次は着陸のため機を水平に保たねば滑走路に激突する。舵が効かない機は左に傾いた姿勢で着陸する。パン、パン、パンと音がして左主翼の翼端が滑走路に接してちぎれ飛んでゆく。今思えば高速撮影の映像を見るが如く超スローの世界だった。ガンと強い衝撃の上、機は進入方向に180度回転して停止した。仲間が助けに来てくれて機から助け出され地上に降りグラダーを見た時、左主翼翼端から1m程もぎ取れていた。その瞬間体中の力が抜けた。その後の事はなにも記憶にない。たった数分の出来事であったが私には20分も30分もの長い時間に思えた。



MAZIORA 183×183
東京都美術館
公募団体ベストセクション展
出品作品 (5月4日～5月27日)

恐怖の体験は自分自身も気付かないまま心の奥底に生き続け全ての色彩を排除した時、「恐怖の白の世界」が原点として存在していたのだ。古希を迎える今、私に残された時間は長くはない、鮭が長い旅の末、生れ故郷の川に回帰するように、白からMAZIORAの軌跡を経て私は白に回帰したい。今年の5月4日～27日まで東京都美術館で開催の「公募団体ベストセクション展」にMAZIORA作品を出品する。この作品が最後のMAZIORA作品の発表となるかもしれない。これからは恐怖の白を脱して、新たな純白の無限域に挑戦する事が出来るか、大きな課題が残されている。

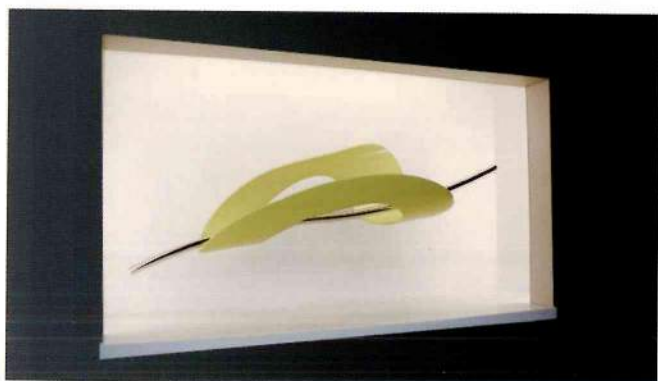


大河内久子

美術家(彫刻家)

日本建築美術工芸協会会員

- ・「間」の空間性を大切にしています。
- ・廻りと対峙するのではなく、周りの環境に溶けこむ作品をめざしています。
- ・手を加えるのではなく、新しい切り口で、その素材を引き出すこと、または出会うことが新鮮です。



「明日へ向かって」和歌山県立医科大学 地域医療センター
1680×500×450mm

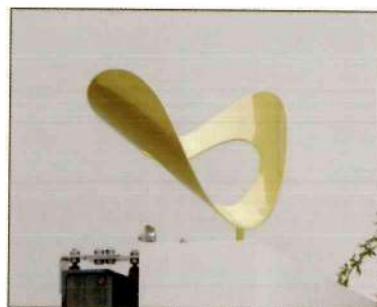
■ グループ展

2007～2010年 毎年アートパラダイス展 建築会館 東京

彫刻、ドローイングの他陶磁器とジャンルを超えて仕事をしています。



“The wing goes through” 1210×965×590アルミニウム



「芽生え」
レストラン
和歌山
400×450×380

<作家略歴>

1979年 京都市立芸術大学卒業 (八木一夫に師事)

■ 彫刻 入選歴

1989年 京都美術工芸展入選、京都文化博物館

2006年 同 入選

1994年 KAJIMA彫刻コンクール模型入選

1998年 同 入選

■ アートフェア システムギャラリーより出展

2013年 BANK ART FAIR 香港

2014年 SELECT ART FAIR ニューヨーク

ART INTERNATIONAL ZURICH チューリッヒ

■ 彫刻パブリックコレクション

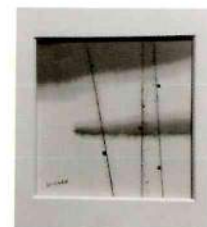
1999年 大阪府堺市斎場「天空への飛翔」

2010年 和歌山県立医科大学地域医療センター

「明日へ向かって」



「時を超えて」
木 160×285×45



ドローイング
2015年140×140

2014年11月京都高島屋にて個展をさせていただきました。現時点での自分をそのまま見て頂きました。何より、まだまだ、これからだと思っています。

三地域横断座談会『なぜ その地に居続けたいのだろうか？』

はじめに

被災地東北への旅は、未曾有の大災害から1年半余りの2012年11月、石ノ森萬画館や天然スレートの雄勝のある石巻市を訪問したことから始まりました。翌年桜の頃には、日本文化の孵卵器とも言える里山に恵まれた田村市に、民俗行事「お人形様の衣替え」見学と、原発被害状況の取材を行いました。原発から30キロ圏内の漁業の町、久之浜も訪ねました。昨年2014年には、これら三地域の方々を東大弥生キャンパスにお招きし、3回の連続座談会を開きました。弥生土器の由来の地は、隣接して縄文土器も発掘されています。此の国の文化の基層を成している縄文文化、弥生文化の学府の森での座談会は、東北の文化と復興の考察を行なうのに相応しいと考えました。また、併催企画・東大構内散策ツアーも好評で、相まって非会員参加者も多数迎えられ良かったと思っております。石巻は都市、久之浜は漁業、田村は里山と、図らずも異なる東北文化の三地域を訪ねた事で、それぞれが深い問題を抱えていることが浮き彫りになりました。

各座談会終了後はaacaホームページにまずは速報を、そして、後日まとめとしての瓦版を掲載。会員及び会員以外の方々とコミュニケーションに大きな力を発揮すると共に、貴重な記録として残すことができました。忙しい中尽力された吉川盛一さん、小野行雄さんに紙面を借りて感謝します。

本年2015年、情報文化部会としては三地域を別冊にまとめ、次への一步としたいと考えています。

最後に、三座談会を何とかやり終える事が出来たのは、調査研究部会の大きな力添えと、情報文化部会メンバーの日常の仕事を超えて大車輪の創造的な働きがあつての事と感謝しております。

情報文化部会部会長 坂上直哉

1. 石巻編

日時：2014年9月26日（金）18:00～21:00（20:00～懇親会）

会場：東京大学弥生講堂アネックス・セイホクギャラリー

出演者：狩野 章（萬画館立ち上げ 中心市街地活性化イベント事業に尽力 元マリニピア松島水族館企画営業部）

阿部紀代子（4代続く料亭八幡屋の女将 街の世話役として地域を纏める存在）

野口隆亮（東京在住 イベントコーディネーター 「パレエが街にやってくる」仕掛け人）

黒木正郎（日本設計にて石ノ森萬画館を設計 震災後の「パレエが街にやってくる」発案者）

司会進行：高橋圭太郎（情報文化部会メンバー 織部製陶陶器取締役東京支店長）

参加者：60名（出演5 協賛2 会員27 非会員24 学生2）



石巻の商店街では「仮面ライダー」や「サイボーグ009」など石ノ森キャラクター達が出迎えてくれる

2012年、aaca 日本建築美術工芸協会・情報文化部会では、3.11 以降～東北の文化を考える～と題し、東日本大震災、被災地を文化的側面から支援しよう…と云う活動を始めた。

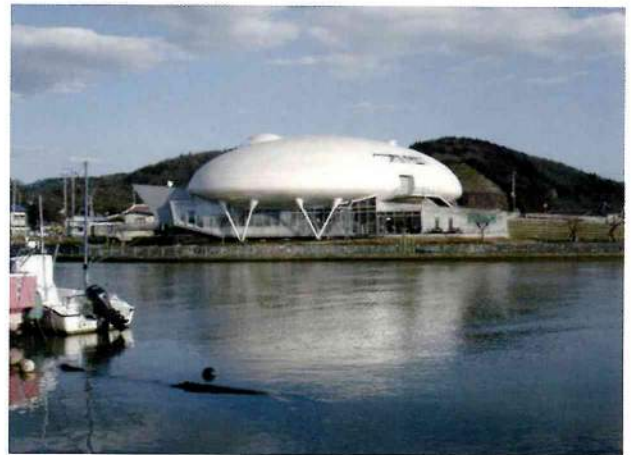
まず、最初の取材地域として“街”を考え、宮城県第二の都市である”石巻市“に注目し取材活動を進め、これまでも小誌や会報誌を通じて、石巻市の置かれている問題点や現状を伝えてきました。抑々、被災地の方々は現在、どの様な気持ちで先の震災を捉えておられるのか？復興の進み具合や障害となっている問題点…解決の糸口を掴んでいるのか？さらに踏み込んだお話を伺いたく“東北三地域横断座談会”を企画し、現地石巻の方々、また、復興活動に尽力されてきた方々を東京にお招きして、被災地の現状や、震災時、建築がどんな役割を果たしたのか…？寺社仏閣に隠されて



出演者左より黒木さん、野口さん、阿部さん、狩野さん



右より2人目・狩野さん、3人目・阿部さん



中瀬に建つ「石ノ森萬画館」

成功する“秘訣”である…等々、お話いただいた。

石巻の商店街出身で、PTAでも活躍された、狩野章さんには、石巻の人々の気風…かつては、東洋一と呼ばれた魚市場があり港町ならではの気風の良さ！外から来る人々を受け入れる寛容な土地柄であること。震災時、商店街の意外な人物の意外な潜在能力の高さに驚かされたお話なども伺った。萬画館建設に当っては、中瀬を東北地域の情報や文化の発信拠点にしようと思論んでいたお話などもお聞きした。また、労働意欲や心の問題にも言及され、『もう、お金による援助はこれ以上必要ない』と話されたことが重く響いた。

最後に野口隆亮さん。東京在住ながら、黒木さん、狩野さんらと共に被災地の子供達を勇気づけようとイベントを企画。2014年の3月15日には石巻中学校に松山バレエ団を迎え「白鳥の湖」を公演。1300名の観客を迎える盛会と成ったそうだ。まさに文化的支援で被災地の皆様を応援されてこられた。

石巻では、震災と云う大惨事を目の当たりにした多くの若いボランティアの方々が来て、何かやり遂げたい衝動をもって地域と向かいあったとき、本来はあり得ない様な、定住する人達までが出てきた…というお話も聞かせていただいた。居心地の良いコミュニティーに役割とそれらの人々を受け入れやすい土地柄もあって「…石巻は良い街！特別です」と語られていたことがとても印象的だった。

最後に、思いつきと勢いだけで始めた、「東北三地域横断座談会」にご賛同、ご協力、ご参加戴きました全ての皆さまに、あらためて紙面上を借りて感謝の意を表したい。
(文責：高橋圭太郎)

いる先人たちのメッセージとは…？等々。3年をへて改めて検証しなければ成らない貴重なお話を伺おう…との“座談会”となった。

これまで取り立てて何も支援らしい支援活動をしてこなかった、東京に住まう我々がどこまで踏み込んだ被災地のお話を伺えるのか…。座談会では石ノ森萬画館を設計し、その後の街づくりにも深く石巻と携わってこられた、日本設計の黒木正郎さんをナビゲーターにパネラーの方々の体験談や現在のお気持ちを語っていただいた。津波に耐えた萬画館の設計コンセプトや、立地である中瀬と呼ばれる北上川河口部には、予てから人々を魅了する場所の力がある事。復興のコンセプトは、「ない物ねだり」ではなく「あるもの探し」街の身の丈に合ったコンパクトな街づくりの方向性などを提唱してきたと伺った。

また、街の顔役でもある、料亭八幡屋の女将、阿部紀代子さんのお話も地元ならではの視点で、北上川への深い愛着と、震災からの“復旧”には、国や自治体を上げて比較的迅速な対応ができていたが、次世代に向けての“復興”となると簡単には予算は使えない事や、外からの支援は地元の受け皿が大切であり、入口に立つ人間を選び、地元の意思と歩調を合わせる事が

2. 久之浜編

日 時：2014年10月17日（金）18:00～21:00（20:00～懇親会）
 会 場：東京大学弥生講堂アネックス・セイホクギャラリー
 出 演 者：松本光司（前いわき市立久之浜第一小学校校長 現いわき市立好間第一小学校校長）
 木村謙一郎（鮮魚仲卸・いちい水産取締役 久之浜第一小学校 PTA いわき市議会議員）
 栗田祥弘（栗田祥弘建築都市研究所代表 久之浜大久地区まちづくりサポートチーム共同代表）
 濱中峻（映像演出家 同上サポートチーム創設当初からのメンバー）
 司会進行：露口典子（情報文化部会副部長 文化環境プロデューサー アートアソシエイツ八咫主宰）
 参 加 者：76名（出演者5 招待者8 協賛2 会員17 非会員40 学生4）

「15才から船乗り一本で52年。久之浜は1年中いろいろな魚介類が獲れて…ブランド品だったんですよ。タコは歯切れ良くて、ヤナギガレイだとかケガニだとか…漁師は海へ出て魚釣って…国民の皆さんに食べてもらうのが一番の幸せ」パーフォーマーの濱中さんにはイヤホンから漁師の言葉が流れているらしい。背後には久之浜の映像…風の音、輝く波を分けて進む船、震災後初めての進水式、大漁旗がはためく。冒頭わずか10分足らずで、参加者を現地へと導いてくれたパーフォーマンスだった。



大漁旗（画面奥）は震災の年の5年生夏休みの宿題「船が出せる時に掲げる旗を考える—大人たちへのメッセージ「漁が出来るようにがんばってください！」

これを受けて、久之浜で生まれ育った木村さんが震災前の地域を語ってくれた。1966年に14の市町村が合併していわき市に。現在は、海沿いの久之浜町と山側の大久町を合わせて久之浜大久地区となっている。久之浜は昔から漁師町。漁港には市場があって、茨城から、双葉から、沖縄からも買い付けにくる賑わいだったそうだ。震災後、津波、その後に火災が起きた海沿いの地域は、福島第一原発から30キロギリギリの圏内。一時全町自主避難となった。

地区には2つの小学校がある。そのひとつ、久之浜第一小学校（被災前250人）は、4月8日に市の中央台北小学校の会議室を借りて170人で再開。8月に赴任

された松本先生が見たのは、間借りで遠慮し遠慮し遊び学ぶ子どもたち。1日70～80人が気分不快で保健室に行く現状から、早く元の学校の環境を整えようと、校庭の線量を下げるところから奮闘が始まった。



「もの言わぬ 社はその日 何を見た」（参加者の投稿より）
 ここに幅50m長さ2km以上で海拔7～8mの堤防ができる。神社は残されることになった。

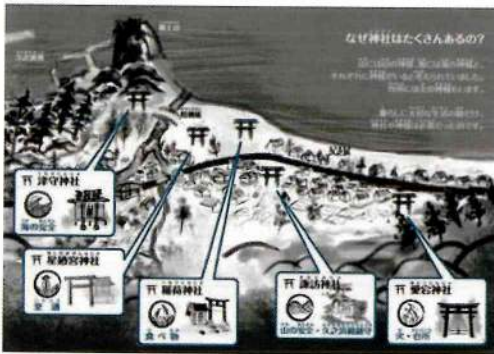
元の場所で再開出来たのが10月11日。それから毎日、1時間近く眠りながらバスに揺られて通ってくる子どもたちを、毎朝ハイタッチで迎えた先生。「おはよう」とハイタッチすると、顔をあげて目を合わせることができると。なるほど。何とか子どもたちに楽しい学校生活を送らせたいと、工夫の数々や当時の様子を、終始ユーモアを交えてイキイキと伝えてくださった。子どもたち190人が、親を説得してまで元の学校に戻った理由がわかったような気がした。

震災後、多くのボランティアが現地に入ったと思われるが、松本先生が「頼んで良かった」と言われたのが栗田さんたちの久之浜大久地区まちづくりサポートチーム。元は、東京都市大学同窓会の青年委員会として、若い人たちが立ち上げた社会的プロジェクトをサポートすることを目的に、卒業生の栗田さんや基さん（共同代表）が考えていたようだ。その頃ちょうど、基さんの同僚が震災後の久之浜を訪れ、後日東京デザイナー学院で作った復元模型の写真がツイッターに載ったのが発端。「模型を持ってきてくれませんか」と呟いたのがいわき市の小澤さん（ガレキ撤去ボランティアノ

共同代表)。そこから久之浜の遠藤さん（建具屋、共同代表）へ、そして、松本先生へと繋がってくる。ツイッターの縁結びもたいしたものだ。

サポートチームは20～30代の建築家や学生が参加している。今までの参加者は総勢100名を越すという。彼らは誰から頼まれた訳でもない。震災後、東北各地でボランティアが活躍したが、やがて潮が引くように人の波も引いていった。ところが、サポートチームには次々リーダーが生まれてきている。奉奠祭（鎮魂祭）でのワークショップ、豆まき大会、神社プロジェクト、防災緑地について考えよう、HISANOHAMA COLLECTION、ベンチプロジェクトなど、企画立案した人が先輩たちのサポートを受けて、プロジェクトリーダーとして実施していくシステムになっているらしい。

話しを聞いていくと、彼らのスタンスがこれまでブレていないことに気づく。地元の人たちに常に寄り添おうとする姿勢だ。自分たちの考えを押し付けることはない。そして、目的は常に「久之浜のまちづくり」にあり、そのサポートを使命としている。子どもたちが学校を好きになる、久之浜を好きになる。大人も自分たちの町に誇りを、愛情を持つ。ここに町づくりの



震災による神輿の担ぎ手不足を懸念する宮司さんの相談を受けて制作。神社がある、神輿を担ぐ、その訳は？全校生徒に配布の「まちと神社」パンフレットより抜粋（2014年キッズデザイン賞受賞）



これからの町のことを考えさせたい。松本先生の意向を受けてサポートチームが細やかに子どもに寄り添い気持ちを引き出していった。大人の前で発表。以前そこにあった幼稚園への思いから防災緑地案に児童公園が実現。神社も残すことに。（2014年キッズデザイン賞受賞）



久之浜の風景写真を選び、それにあうファッションを考えて作ってファッションショーを展開。子どもたちがランウェイを歩きポーズを決める。（HISANOHAMA COLLECTION）



久之浜が一望できる山の上で酒を飲んだり花見がしたいという地元の声。人が集まるきっかけとしてのベンチを設置。ひとつのシステムが提供できたのでは。

根源があると栗田さんは話してくれた。そのきっかけさえ置ければ、後はドミノ倒しのように自動的に動いていくのではないだろうか。

奇しくも座談会前日に地元の遠藤さんと話す機会を得た。自分たちができる範囲は限られている。そこに未知なる力をもった人たちが入ってきてくれることによって、自分たちに余力ができるのは有難い。文化の力を借りて、一緒にもがき楽しむプロセスでお互いが育っていると話してくれた。

若い力が確実に育っていると実感できる、心強い、頼もしい座談会となった。（文責：露口典子）

【追記】

☆座談会最後に、久之浜ご出身の80才のご婦人が「久之浜のためにこんなにさせていただいて」とサポートチームに熱いお礼を述べられた。

☆久之浜にご一緒した日高理事が昨年（H24）5月逝去。久之浜を題材にされた作品を会場に設置、奥様も参加された。



座談会の様子

上：出演者右から木村さん、栗田さん、濱中さん
下：出演者の松本先生（左）

3. 田村編

日 時：2014年11月28日（金）18:00～21:00(20:00～懇親会)
 会 場：東京大学向ヶ岡ファカルティハウス
 出 演 者：渡辺辰夫（田村市都路にてレストラン・ホットハウス経営 都路商工会会長）
 逸見克己（郡山出身 考古学協会会員として主に田村市の遺跡調査に従事 郷土歴史編纂）
 上遠野伸一（田村市船引町出身 田村の魅力伝えようと郷土写真家として活躍）
 吉野ヨシ子（情報文化部会メンバー 田村市夢大使 小学校教師を経て金属彫刻に携わる）
 坂上直哉（情報文化部会部会長 美術家 アートワーク空主宰）
 司会進行：露口典子（情報文化部会副部会長 文化環境プロデューサー アートアソシエイツ八咫主宰）
 参 加 者：48名（出演者6 招待者3 協賛2 会員15 非会員21 学生1）



里山のさくらと祠が写っている写真です。小沢の桜と命名され、2000年の春に封切られた「初恋」で田中麗奈さんが主演されたロケ地です。映画の中では「願い桜」となっている。この映像を背景に座談会がスタートした。2011年以降、いったい何があったのか。

私達が田村に行ったのは、お人形様の衣替えの行事見学である。（都市の風景を考える会の一部会である。）まず、田村の場所を上遠野さんから地理的なことの説明を戴くと、平成16年船引町、常葉町、大越町、滝根町、都路村が合併し田村市となる。四季折々、福島県の中央台地に位置し里山の美しい原風景を残し、秋には家族での稲の収穫風景が見られた。3.11までは……。今もその風景と、変わらないのも実感している。お人形様の衣替えもその一つである。地域の人しか知らなかったのを、さまざまなマスコミが知るようになったのは、衣替えを見て感動した上遠野様が広報誌に取り上げたことがきっかけとなり、現在国立歴史民俗博物館（佐倉市）にレプリカが置かれている。さてこのお人形様がいつごろからこの地に存在するようになったのか？今3体しか現存していないのであるからすばらしいとしかいいようもない。郷土史研究家の逸見さんによると、文化5年（江戸1810年）の時期ということとは判明しているとの事。

このお人形様は現在7体だったといわれており磐越街道沿いに江戸時代初期にそれぞれの村に疫病などが入ってこないように、このような藁人形を村の境に立てるといってお触れがあったということである。それ以来全国的に広まったようである。私達の見た3体にも特徴があり簡単にいうと、

①屋形のお人形様はそれぞれの集落から4本の柱を1本ずつ持ち寄り4m80cmあり、50年に一度取り替える。

②朴木橋のお人形様は、少しおしゃれで、金歯でヒゲがない。黒く練ってあるのでそれがひげと考えられる。3m50cmである。

③堀越のお人形様は現在屋根をつけてある。これは明治35年に一度廃絶したが平成3年に祀られお面は明治のままである。ケヤキの1本彫りである。



古事記のなかでは、山田の案山子（かかし）とのこと。いつも見慣れていた故郷船引駅中のお人形様の歴史を知る事で、一層親近感が感じられ、これからもずーと残して生きたい風景と捉える事ができました。しかし、残したくない風景をこれから、渡辺さんに伺うが、何度聞いても胸がいたくなる。渡辺さんは、都路から避難されレストランを船引町に平成24年に新装開店し都路商工会会長として日夜奮闘されている。



お人形様お面を囲んで
正面・上遠野さん、左隣・渡辺さん、右下脇・逸見さん



渡辺さんの自宅は20kmの圏内にあり元ホットハウスは20km圏外に位置している。貧しい村であったが、昭和43年原子力発電所の建設が始まると都路地区から働きに行く人も多くなり所得が増えていった。原発が稼動した年に東京のレストランに勤務、帝国ホテルの技術顧問から指導を受ける。その後、都路に戻り、バイパスにお店を開業、都路の明かりが灯りました。きっと、これがホットと言う意味かとおもいます。最後にお伝えする都路の方との会話でそう感じた。震災日の2時46分激しい揺れに見舞われ、外に出ると、小学校校庭の裏山が一瞬に滑り落ちていった。レストランの200kgのボンベは50cm飛び出し、食器はすべて割れていた。自宅は、被害がない状態。次の日、片付をしていると、大熊方面から、途切れることなく車がやってきて、体育館に避難誘導、大熊町から来た商工会長に原発が危ないとはじめて聞かされた。その為か、渡辺さんは、震災は、3.12ですと言われたことがうなずけました。その奮闘振りを新聞記事で拝見し、私達に伝えてほしいという願いで座談会が実施にいたしました。後に言われる都路方式といわれる、政府と直接やり取りをする方法である。その結果会員の90%

が賠償の申請を終えたとの事。その後多方面でこの方法で動いていったことによる。しかし、都路の人口3000人であるが20kmと30kmは分断され20kmの帰還率は33%と30kmの帰還率は51%である。又、190名いた児童のうち平成26年に開校した児童数は21名と言うことであり、過疎化が何年もこの原発により早まったとのこと。だからこそ、今、どう取り組むかは、切実な問題であり、原発事故がいかに大きいものかが伺われる。



都路町内に設置された
汚染除去土壌保管場所

このフレコンパックも取替え時期に差し掛かるためどうするのか？過疎化対策のコンパクトシティ構想をたて、DOMOと言う、生活に必要なお店を設け。さまざまな取り組みに奮闘されている。

- ・自宅はネズミの住処になっている。
- ・東京電力の電気は東北人は使っていない。
- ・都路の方がホットハウスに寄られて、渡辺さんの肩をぽんと叩かれてホッとするとところが無いんですよ。俺は寂しいんです。



ホットハウスの皆さん（後ろ中央・渡辺さん）

3年たとうが何年たっても決して風化させてはいけない原発を考える時忘れてはいけないと思いました。

（文責：吉野ヨシ子）

協賛：織部製陶株式会社 菊川工業株式会社 中村ブレイス株式会社
株式会社平和合金 株式会社ベクトル 安井建築設計事務所

情報文化部会メンバー：

坂上直哉（部会長） 露口典子（副部会長） 高橋圭太郎 立松直樹
中川一人 中村仁美 藤田益一 吉川盛一 吉野ヨシ子

協力：七字祐介 小野行雄 南三一郎 中島三枝子 高柳登美 野口真里
長谷禎久 細見雄次 谷川智崇 松川健太 古澤竜男 屋良朝哉
斉藤大樹 岡本和也

新入会員

個人会員

中藺哲也	〒730-0024	広島市中区西平塚町8-12 シヤトレ三陽203	TEL 082-543-4603	ナフ・アーキテクトアンドデザイン(有)
名和研二	〒157-0064	世田谷区喜多見8-1-6 河野ビル301	TEL 03-5494-5250	NAWAKENJIM(株)一級建築士(事)
芦澤竜一	〒530-0015	大阪市北区中崎西1-1-4 中島ビル	TEL 06-6485-2017	芦澤竜一建築設計事務所
中村拓志	〒408-0313	世田谷区駒沢2-25-7-2F	TEL 03-6805-4051	(株)NAP建築設計事務所
山中悠嗣	〒143-0025	大田区南馬込6-27-11	TEL 03-6410-6873	GENETO建築設計事務所
河根一仁	〒103-8542	中央区日本橋小網町6-1	TEL 03-3249-1531	(株)山下設計
帆足枝里子	〒157-0072	世田谷区祖師谷3-27-11	TEL 090-8027-4964	工芸家(染色・布)
重松慧祐	〒243-0112	神奈川県愛甲郡清川村煤ヶ谷3287-1	TEL 070-5016-7593	(株)阿蘇石材
日置 滋	〒104-8370	中央区京橋2-16-1	TEL 03-3561-2010	清水建設(株)設計・プロモーション統括

法人会員

(株)マラツツイ・ジャパン 〒101-0051	代表取締役社長 玉岡雅代 千代田区神田神保町1-64-5F	担当 総務部 海老名真希 TEL 03-5283-1355
----------------------------	----------------------------------	----------------------------------

会員の異動

(株)クラウドポイント 宇部建設資材販売(株)	法人名称変更 担当者変更	旧社名 (株)オックスプランニング 廣角京一(前担当者 長島茂利)
----------------------------	-----------------	--------------------------------------

訃報(26年度)

岡田新一	10月27日逝去	岡田新一建築設計事務所 最高裁判所・警視庁本庁舎・岡山県立美術館・宇都宮美術館等設計 会員(1989・3～2014・10)、日本藝術院会員・日本建築学会終身正会員、
榮久庵憲司	2月 8日逝去	GKデザイン機構会長 醤油卓上瓶・ヤマハオートハイ・東京モルル・新幹線「こまち」等デザイン 会員(1990・6～2008・4)、理事(1991・6～2004・5)、AACA賞選考委員(1990～2001)、

東日本大震災「芸術文化復興預金」への募金のお願い

2015年2月末現在 109,511円

協会では、東日本大震災により逸失した文化財及び地域文化の復興のため、協会指定団体へ27年度に寄付を行なう事になり預託先を選定中です。会員の関係先で希望団体が有りましたら事務局迄お知らせください。会員の皆様には活動やチャリティー活動等による売上の一部を募金に協力して戴きますようお願いいたします。

復興預金口座は下記に記載いたしました。

郵貯銀行 港芝五支店 当座預金 口座名：AACA芸術環境復興預金口座
店番：019 口座番号：0338383

編集後記

協会が25周年を迎え、会報の構成に変化を持たせました。

協会の活動、会員の活動、一般の方々からの寄稿文等を中心に編集・発送まで部員が協力して運営されています。

会員の皆様の活動報告、作品紹介、展覧会等のご案内や企業の広告等を会報に掲載いたします。詳しくは会報編集部会にご相談ください。

会報編集にご興味のある方は、参加をお待ちしております。

発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
発行人 会長 岡本 賢

〒108-0014
東京都港区芝5-26-20 建築会館6階
Tel 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
Url http://www.aacajp.com
E-mail info@aacajp.com

編集 総務委員会 会報編集部会
部会長 野口 真理
部員 飯田 郷介 石田真人 竹生田 正
中村 弘子 山崎和子 山崎 輝子
事務局 石田真人

印刷協力 美和野印刷株式会社

